

## 『福翁自伝』の真実（解説）

- \* 福澤諭吉は『文明論の概略』諸言で「一身にして二生を経るが如く」と言っています。レジュメでは『起』『承』が一生で『転』『結』が二生です。（二つの人生を生きた事。）
- \* 『福翁自伝』の特徴を目次で見ると、1 幼少の時～10.王政維新までは諭吉が生まれてから 33 歳までの経歴、つまり半生（一生）の出来事が書かれておりますが、後の半生 33 歳～66 歳（二生）では、11 暗殺の失敗～14 品行家風 のように経歴ではなく印象に残った出来ごとを述べているのが特徴です。そして 15 老余の半生で、後半の人生で特筆すべき出来事を語っています。
- \* それでは、福澤諭吉の生涯（レジュメ）と『福翁自伝』の目次を見比べながら、福澤が語らなかった事、語ったがその語りに誤りがあった事を、松沢弘陽校注の『福澤諭吉集』で確認致します。
- \* 「幼少の時」は全くその通りで問題なし。
- \* 「長崎遊学」の「奥平壱岐にねたまれる」が最初で自伝のあちこちで諭吉は壱岐をこき下ろしているが、事実はそうではなかったらしい。→松沢弘陽校注 2 頁最後～3 頁前最初の部分。5 頁の項目 7. のところ。
- \* 「大阪修業」～「緒方の塾風」～「大阪を去って江戸に行く」～「はじめてアメリカに渡る」～「ヨーロッパ各国に行く」～「攘夷論」とここまでは問題なし。
- ★ 問題は「攘夷論」と「再度米国行」の間（1864 年～1866 年）の歴史的事実を全く語っていない。→松沢弘陽校注 1 頁最後～2 頁最初の部分。（大問題）
- \* 「再度米国行」の全ての所、特に「長官に対して不従順」で、上司の小野友五郎に対して強く批判しているが事実はそうではなかったらしい。→松沢弘陽校注 5 頁の項目 7. のところ。
- \* 「王政維新」の「幕府の攘夷主義」のところで、諭吉は「井伊直弼は開国主義者ではなく攘夷家だ」と言っているがそうではなかった。→松沢弘陽校注 3 頁 6 行目。
- \* 「王政維新」の「長州征伐の理由書」のところでは、諭吉が自ら幕府に対して「長州再征に関する建白書」を出しているにも拘らず、その事には触れず幕府の態度を批判している。
- \* 「暗殺の心配」～「品行家風」では特に問題なし。
- ★ 「老余の半生」の「明治 14 年の政変」では語らない事があり、→松沢弘陽校注 2 頁 9 行目。「井上角五郎の証人」では語りに誤りがある。→松沢弘陽校注 4 頁 4 行目。
- \* 「独立自尊」の建前から福澤に力を藉した人々は『福翁自伝』の語りから省かれた。小幡篤次郎、緒方洪庵夫妻、木村芥舟、等がそれである。→松沢弘陽校注 5 頁、6.